

余談

さて、ところでこの下巻、誤植が目立つ。一般的な出版レベルに到達していない。今回の該当部分でざっと目についただけでも、たった2ページの範囲で、

「恥かしく思っている」[242]
そのす当然の位置[243]
しぶとい力を発揮する[243]

これはもしや故意か？と思わせられる。誤植は目次にも散見。

故意か？と思わせられる根拠は、訳註[p.333-]を見る限りデリダは、転記ミスが多いことがわかる。*1、*12、*19、*20、*21、*22、*26、*27、*29、*30、*31、*32など多数あり、そして本書の最後すら*89と訳者の訂正を受けている。デリダは雑な性格なのだろうか？ 見直しかしないのか？

デリダの方法

デリダがルソーの「言語起源論」を題材にとった理由は、ルソーのエクリチュールに対する態度が西欧のエクリチュールに対する態度を最もよく体現しているからで、「言語起源論」の内容と取り扱い方そのものにそれがよく現れているからだ。

ルソーが文字言語(エクリチュール)の理論を完成することも刊行することもけっしてなかったのはなぜであろうか。

ルソーの鋭い矛盾・対立は言語の起源のシーンに「身振り」と「声」とを対置したところ(「言語起源論」第一章)から始まる。それ以後は、必然的で自然なストーリーである。増田真訳『言語起源論』(岩波文庫)を迂回してみよう。ルソーの文章は、一見すると、とてもわかり易い二分法をとっている。

身振り

- ・視覚
- ・欲求
- ・子音

声

- ・聴覚
- ・情念
- ・母音

そして、エクリチュールへの断罪は、

諸言語の歴史と進歩を学べばだれでも、声[母音]が単調になればなるほど子音が増え、消えゆく抑揚や平均化する長短に対して、文法的な組み合わせや新たな分節をもって補われることがわかるだろう。しかしそのような変化が生じるには時間がかかる。欲求が増え用件が複雑になり、知識が広まっていくにつれて言語の性格が変わっていく。それはより正確になるが情熱的でなくなる。感情に対して観念が置き換わり、もはや心ではなく理性に語るようになる。そのこと自体によって抑揚は消え分節が広まり、言語はより正確でより明晰になるが、よりだらだらとして無声で冷たくなる。この進歩はまったく自然であるように思われる。[「言語起源論」第5章文字表記について、33]

文字表記は言語を固定するはずのものと思われるがまさに言語を変質させるものだ。文字表記は言語の語ではなくその精髓を変えてしまう。文字表記は表現を正確さに置き換えてしまう。人は話すときには感情を表し、書く時には観念を表すものだ。書くときには、すべての語を普通の意味で使わざるをえない。しかし話をする人は調子によって意味を変え、意味を好きなように決めるのだ。(略)そして、書かれる言語は話されるだけの言語の生き生きとした性格を長く保つことは不可能だ。人は声〔母音〕を書くが音(おん)は書かない。ところが抑揚ある言語では言語の力強さの大半をもたらすのはあらゆる種類の音(おん)、抑揚、高低である。そしてまさにそれが、普通の文を、その場だけに適したものにするのだ。この方法を代補するためには取られる方法は書かれた言語を引き延ばし、本から弁舌へと移り、ことばそれ自体の力を弱めてしまう。まるで書くように話せば、話をしながら読んでいただけになってしまう。[同 39-40]

と進む。このそれっぽい、典型的なエクリチュール批判とパロール称揚に対し、デリダの『グラマトロジーについて』の切り込みは次のように始まる。

問題は諸言語の起源における代補である。この代補は、まさしく付加的代補物、音声言語(パロール)の代補を提示する。それは、言語が分節され始める地点、つまり言語が自身に欠如することによって誕生する地点に挿入されるのであって、そのとき言語における起源と情念との刻印(しるし)であるアクセントが、分節化という別の起源の刻印の下に消えて行く。ルソーによれば、文字言語(エクリチュール)の歴史はまさしく分節化の歴史である。叫び声の言語化は、一つの運動であり、この運動によって話された充溢はみずから失い、うがち、引き裂き、分節しながらそれ自身となり始める。叫び声は、母音的音声言語(パロール)を消し始めることによって母音化される。ところで、本来的に〔固有に〕言えなく話すこと<の>話されるもの、つまり声のアクセントをなすもの、の起源的消失の説明が問題となるまさにそのとき、ルソーはその文字言語に関する章を開始する。[245]

ここでレジュメ冒頭に『言語起源論』からの引用したのと同じ箇所に戻る。今度は、デリダ『グラマトロジーについて』からの孫引きによって『グラマトロジーについて』に流入していこう。

「言語の歴史と進歩を研究する者は誰でも、声が単調になればなるほど子音の数が増え、アクセントが消えて音の長さが同じになる代りに、文法的な組み合わせや新たな分節音がそれの<代補をする>ということが分るだろう。だが、こういった変化が起きるのは、ただ時間の力によるだけである。欲求が増大し、物事が複雑になり、文明の光が拡がるにつれて、言語は性格を変え、より正確とはなるがより情念的ではなくなる。言語は感情を観念で<代替し>、もはや心情には語りかけず理性に語りかける。まさにそれゆえに、アクセントは消え、分節化は拡大する。言語はより厳密に、より明晰になるが、いっそう単調で響きが鈍く、冷たくなる。この進歩は、私にはまったく自然的なものだと思われる。(略)」[245-246]

増田訳の『言語起源論』はルソーの原文を直接参照し、日本語的にこなれた訳を目指しただろうと思われる。それに対し、デリダを経たこの引用部分の翻訳は、デリダの意図を明瞭に刻んでいる。つまり、デリダの読解の痕跡が読み取れる。

訳の違いと引用者の強調を拾い上げると、「抑揚」が「アクセント」に、「補われる」が「<代補をする>」に、「置き換わり」が「<代替し>」に、「情熱的」が「情念的」になどがある。なかでも気になることとして、「補われる」という受動態が「<代補をする>」という能動態に変更され、その上で強調されていることで、これは「置き換わり」という主体不明なニュアンスが「<代替し>」という意志の明瞭さを得ていることにも通じる。日本語では主体を曖昧にしたまま処理できるため、そのように増田訳は翻訳されているということだろうと推測できる。

〈代補する〉という能動的な言葉は主体を明瞭化する。「分節」が「アクセント」を代補し、観念が感情を代補する。その結果、この代補は主従関係を生む。さらに主従関係は前後関係へとスライドする。そうして前後関係として、時間を問題にすることで、必然的に起源と現在の問題に帰着せざるを得ない。最初と最後。その起源において、本来、後から来たはずの「エクリチュール」が、先に生まれたはずの「パロール」の前に、内部に、その開始の条件として、あることを示していく。

次に、デリダが引用する「エクリチュールについて」の章の最後の部分を同じく二通りの通路で見てもみる。まず増田訳、

人は声〔母音〕を書くが音（おん）は書かない。ところが抑揚ある言語では言語の力強さの大半をもたらすのはあらゆる種類の音（おん）、抑揚、高低である。そしてまさにそれが、普通の文を、その場だけに適したものにするのだ。この方法を代補するために取られる方法は書かれた言語を引き延ばし、本から弁舌へと移り、ことばそれ自体の力を弱めてしまう。まるで書くように話せば、話をしながら読んでいただけになってしまう。[「言語起源論」40]

『グラマトロジーについて』からの孫引き、

人は音声を字に書くのであって、音色を書くのではない。ところで、アクセント化された言語においては、あらゆる種類の音色、アクセント、抑揚がその言語の最大の活力を作り出している。またそういったものが、他の点では普通の文章を、それが存在する場所だけにふさわしいもの〔固有なもの〕にするのである。言語を代補するためにとられる諸手段は、書かれた言語を拡大し長くひきのばし、また書物を言葉（ディスコース）の中にもち込むことによって音声言語（パロール）そのものを衰弱させる。文字を書くのと同じようにすべてのことを語るならば、話しながら読んでいくにすぎないのだ。[268]

デリダが強調したゴシック体の部分「それが存在する場所だけにふさわしいもの〔固有なもの〕」は、パロールはそれが発せられた地点でのみ発現するが、エクリチュールはその固有な場所（いまここ）を「移動させ」る（代補する）ということである。デリダの使う「固有」という言葉の地点はここから算定できる。例えば、固有名詞の固有もこの意味である（それが存在する場所だけにふさわしい名詞）。

この地点からエクリチュールの役割が（コンディヤックを借りて）導かれる。「エクリチュールの役割は、たんに遠いだけでなく視野の全く外にあり声の射程距離を全く超えている複数の主体に到達することである[269]」。固有なもの＝たった一つのもの（パロール）から複数の主体（エクリチュール）へ。ある特定の一つの地点から複数の地点へ複製されながら移動する。

もちろんこれは文字というものが持つ原理的な特徴を言い表している一般的な理解に過ぎない。デリダはこういう当たり前のことをデリダ特有の言語ネットワークを使って話すことによって、ある場所を構成していく。この場所から、複製ミス（誤植、誤記、誤読）や移動ミス（誤配）は、可能性として、言語的必然として、近隣の言語ネットワークから、導かれることになる。「散種」なども。

このようにルソーの「言語起源論」へ至る2つの経路によって、「テキストの構造（テキストのテキスト）」を通り抜けることで、デリダの語彙をすくい上げることはどうやら可能である。この方法は、デリダがルソーを徹底的に読み解いた方法の一部を構成しているかもしれない。つまり、ルソーのテキストを同時代のコンディヤック、ウォーバートン、デイドロを経由させ、同時に直接読んでもゆく読み方であり、また、ルソーの「告白」と「言語起源論」を2つの経路にとり、その差異を読むことでもある。注釈の重用もそれにあたるかもしれない。

この読み方は注意深く経路を取り、注意深くその差異を抽出することで成果を得る。必要なのは注意深さであり、これがデリダの独自の場所を特徴づけている。デリダのアイディアはシンプルだが、その作業は緻密である。しかしこれを一つの理論と呼ぶことは不可能であり、これはあくまでも「デリダの方法」で

あり、同一の到達点に対して、2つ以上の経路をとり、注意深くその差異を検出すること、とまとめることができる。このとき、初期に設定されたはずの「同一の到達点」は、それぞれの経路によって「異なる点」に到達する「可能性がある」ため、すでにもともとどこにもなかったはずとなる。これが方法としての「書差学(グラマトロジー)」であろう。グラマトロジーという言葉自体は多重に複数的に使われているので、その一つの意味という程度ではあるが。

しかし、ここで疑問がわく。「余談」で示したようにデリダに注意深さはないように思える。しかしこれはおそらく説明できる。過集中と散漫とが同居し、一般的には見つけにくいようなある連携を発見するのに長けている。と。だから、この方法はあくまでもデリダの方法という以外に言いようがない様相を呈する。確かに示されてしまえば同意せざるを得ないが、それを得るための道筋は極めて恣意性が高く、普遍性に乏しい。

代補の代補

代補以前にはいかなる現在も存在せず、それゆえそれはただ自身だけに、つまりもう一つの代補に先行されるだけである。代補とは、つねに或る代補の代補である。人は代補から本源へと(du supplement à la source)遡ることを望むが、本源においては代補(du supplement à la source)が存在すると認めざるを得ないのだ。[309-310]

この(du supplement à la source)はフランス語では全く同じフレーズだということだろうか。「代補はつねに或る代補の代補」なのは、代補と本源にまつわるフランス語特有の言い回し(du supplement à la source)から来ているということだろうか。それとも誤植？ まさか。デリダがそそっかしいのはともかく、その上、訳者までそそっかしい可能性を追いかけるのはかなり大変。「余談」で示した、日本語版に(も)明らかな誤植が目立つ状況が足場を揺るがせてくる。

エクリチュールとパロール

この主題が繰り返されるのにそろそろうんざりしてきたので、雑にまとめる。

エクリチュールはパロールの代補であるが、パロールを開始する条件がエクリチュールである。という、代補と起源(本源)の位置関係をデリダは「ルソーに」言いたいが、並べるとこうなる。

- 1 叫び声(音)
↓ 分節
- 2 声(パロール)
↓ 置き換え(代補)
- 3 文字(エクリチュール)

分節をエクリチュールとすれば、パロールはエクリチュールに代補されていることになる。ルソーの「夢」である生き生きとした「言葉(パロール)」は、分節を開始する以前の叫び声に相当するのであって、それは言葉ではない。by デリダ。

もちろん、これは経路の一つに過ぎない。

- 1 絵
↓ 記号化
- 2 表意文字(エクリチュール)

というパロールを経由しない経路も参照される。その他の経路もいろいろと(DNAとか)。

デリダがルソーを代補する

上記で引用した日本語版『言語起源論』の解説に、

『言語起源論』は長いこと執筆年代が確定されなかった作品である。(略)ほかの作品との関係やルソーの作品全体の中の位置づけなどの問題について、最近まで『言語起源論』は軽視されており、あまり論じられることはなかった。

しかし、デリダが『グラマトロジーについて』において『言語起源論』に関する研究史を踏まえつつ、『言語起源論』の執筆年代を検討して以来、この作品は初期の未熟な作品でもなく、公刊をあきらめた失敗作でもないことが定説になったと言っていい。[『言語起源論』135-136]

「言語起源論」は「グラマトロジーについて」によって再度見出された(再現前)。「グラマトロジーについて」がなければ「言語起源論」はその地位を得ていない。当然、時系列的には「言語起源論」が先立つにもかかわらず、「言語起源論」の存在の前に「グラマトロジーについて」があることになる。「グラマトロジーについて」は「言語起源論」の存在(現前)の条件であり、「言語起源論」をルソーに代わってデリダが補った。このような位置関係をイメージすることができる。

本書の位置

デリダの方法でどれだけ遊べるか、どれだけ面白がれるか、どれだけ面白くなるかということがこの本を価値づけるとすれば、この本はかなり価値がある。

デリダは本書で、西欧という、形而上学という、歴史という、言語という、哲学という遊具は果たしてどれだけ愉しめるか、を愉しんだ。デリダにとって、「閉域」は乗り越えられるかどうかという、深刻な切羽詰まった解決され「ねばならないであろう[293]」という難題(プロブレム)というよりも、むしろ、そうやって深刻に考えている人たちがよってたかって取り組んでいる興味深い問題(クエスチョン)、という哲学マニアの立場であり、この閉域自体が面白く遊べるフィールドであった。脱出ゲーム的に。異なる比喻を使えば、羊たち(歴代の哲学者たち＝固有名詞たち＝哲学の歴史、哲学と歴史)の後ろを追いかけて追いついて立てる羊飼いの立場となる。それぞれ固有の羊が持つ固有の必然性はデリダにはない。

この本は、どのように愉しんでいるかというものであって、哲学(の系譜、つまりは歴史。不愉快な夢)というよりも、文学(自覚した夢＝目覚めた夢)に位置する。この文学の文学性、つまり「文学そのもの」は、つねにその都度、自らを断絶しつつ再現出(再現前)し続けるテキストの代補作用のことでもある(と後に弟子のナンシー)。このことは以下のルソーの『エミール』の注釈の引用で本書を終えたデリダもつねにすでに自覚している。と読めなくもない。

「……人々は或る不愉快な夜の夢を哲学だとして、深刻ぶってわれわれに示す。私もまた夢を見ているのだと言われるかも知れない。それはそうだ。しかし、他の人とは違って私は自分の夢を夢だとはっきり言うのであって、その夢が目覚めている人々に何か役立つことがあるかどうかは、読者に探求していただくことにしようと思う」[331]

あとがき

面白い本だった。「不思議のダンジョン」のように「1000回遊べる」。テキストを毎回違うダンジョンに潜り込むように読むことができるのか。と。

付録

見比べやすくするために本文で引用した『言語起源論』と『グラマトロジーについて』の同一箇所を並べて転記する。

『言語起源論』

諸言語の歴史と進歩を学べばだれでも、声〔母音〕が単調になればなるほど子音が増え、消えゆく抑揚や平均化する長短に対して、文法的な組み合わせや新たな分節をもって補われることがわかるだろう。しかしそのような変化が生じるには時間がかかる。欲求が増え用件が複雑になり、知識が広まっていくにつれて言語の性格が変わっていく。それはより正確になるが情熱的でなくなる。感情に対して観念が置き換わり、もはや心にではなく理性に語るようになる。そのこと自体によって抑揚は消え分節が広まり、言語はより正確でより明晰になるが、よりただらだらとして無声で冷たくなる。この進歩はまったく自然であるように思われる。[「言語起源論」第5章文字表記について、33]

『グラマトロジーについて』

言語の歴史と進歩を研究する者は誰でも、声が単調になればなるほど子音の数が増え、アクセントが消えて音の長さが同じになる代りに、文法的な組み合わせや新たな分節音がそれの〈代補をする〉ということが分るだろう。だが、こういった変化が起きるのは、ただ時間の力によるだけである。欲求が増大し、物事が複雑になり、文明の光が拡がるにつれて、言語は性格を変え、より正確とはなるがより情念的ではなくなる。言語は感情を観念で〈代替し〉、もはや心情には語りかけず理性に語りかける。まさにそれゆえに、アクセントは消え、分節化は拡大する。言語はより厳密に、より明晰になるが、いっそう単調で響きが鈍く、冷たくなる。この進歩は、私にはまったく自然的なものだと思われる。(略)[245-246]

『言語起源論』

人は声〔母音〕を書くが音(おん)は書かない。ところが抑揚ある言語では言語の力強さの大半をもたらすのはあらゆる種類の音(おん)、抑揚、高低である。そしてまさにそれが、普通の文を、その場だけに適したものにするのだ。この方法を代補するために取られる方法は書かれた言語を引き延ばし、本から弁舌へと移り、ことばそれ自体の力を弱めてしまう。まるで書くように話せば、話をしながら読んでいただけになってしまう。[「言語起源論」40]

『グラマトロジーについて』

人は音声を字に書くのであって、音色を書くのではない。ところで、アクセント化された言語においては、あらゆる種類の音色、アクセント、抑揚がその言語の最大の活力を作り出している。またそういったものが、他の点では普通の文章を、それが存在する場所だけにふさわしいもの〔固有なもの〕にするのである。言語を代補するためにとられる諸手段は、書かれた言語を拡大し長くひきのばし、また書物を言葉(ディスクール)の中にもち込むことによって音声言語(パロール)そのものを衰弱させる。文字を書くのと同じようにすべてのことを語るならば、話しながら読んでいるにすぎないのだ。[268]